

「ありがとうございます。富士銀行平塚支店でございます」

「あの、振込があったかどうか確認をしたいのですが・・・」

「ではお名前と口座番号をお願いいたします」

「飛田設計事務所です。口座番号は普通口座で八三三一五三八です」

「はい、少々お待ち下さい」

「お待ちいたしました。お振込は、いつからの分を申し上げればよろしいでしょうか？」

「はい、七月二十日から、昨日七月三十一日までの間に振り込まれている分があれば教えていただきたいのですが」

「はい、それでしたら、一件ございます。七月三十日に笹野誠次郎様から八十八万八千円振り込まれています」

「七月三十日ですね。お忙しいところありがとうございます」

「いいえ、どういたしまして」

電話を切って杉浦は経理主任の堀川に内線電話でこの件を伝えた。

「はい、堀川です」

「おはようございます。杉浦です」

「ああ、おはよう」

「振込の件ですが、富士銀行に確認したところ、笹野誠次郎様から、おとこの七月三十日に振込があったことがわかりました」

「振り込まれた金額は？」

「はい、八十八万八千円です」

「それなら笹野様はOKだな。でも他に長谷川様や下嶋様からの分がまだ振り込まれていないということだな。急いで、長谷川様と下嶋様に再度支払いのお願いをしてくれ」

「はい、わかりました。早速、電話を入れてみます」

杉浦は顧客管理のファイルを開くと、長谷川慎吾と下嶋久雄という顧客の連絡先の番号を控え、受話器を持った。

「はい、長谷川でございます」電話に出たのは、長谷川の妻、里美夫人である。

「私、飛田設計事務所の杉浦と申します。いつもお世話になっております。恐れ入りますが、慎吾様は本日はご在宅でしょうか？」

「すみません、長谷川は外に出ておりますが・・・。差し支えなければ、私が代わりにご用件を承りましょうか？」

「では、お願いいたします。実は、先月にご請求させていただきました分のお支払が、まだ確認できませんので、そちらの振込予定日を教えていただけませんでしょうか？」

「大変申し訳ございません！ すぐ本人に確認して折り返しご連絡いたします。失礼ですが、お名前をもう一度お願いいたします」

「はい、飛田設計事務所、経理課の杉浦です。電話番号は三二二—八八六九です。よろしくお願いたします」

そう言って杉浦は電話を切り、「次は下嶋様か・・・」と呟いた。